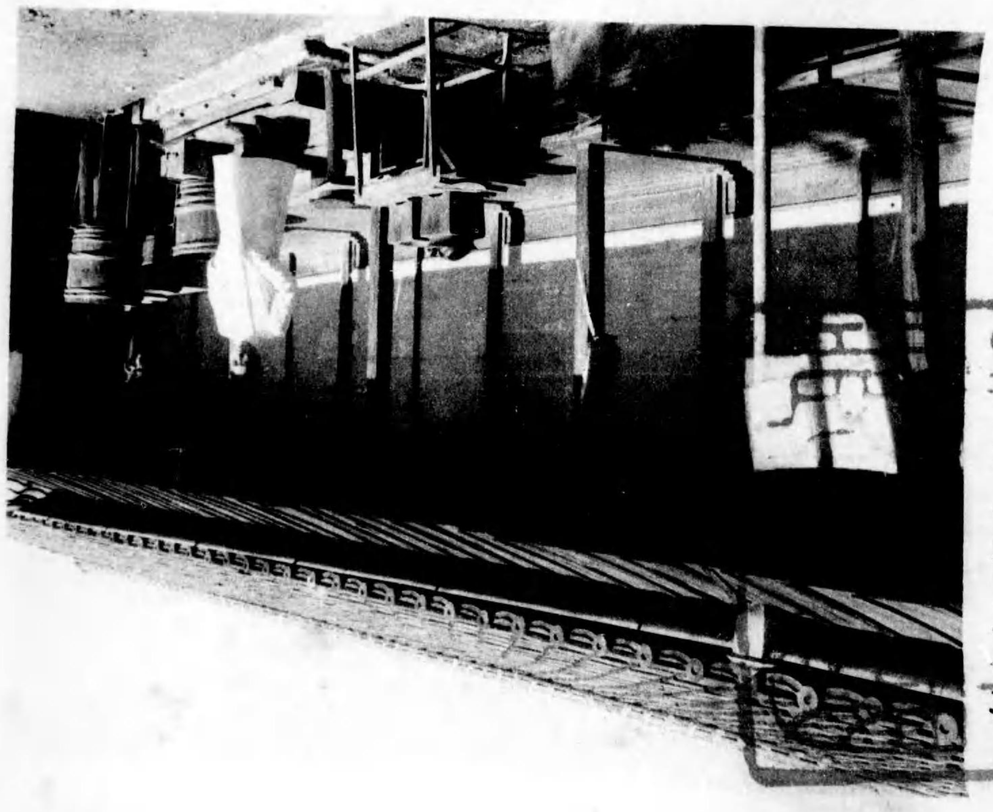
特100
515

鰐島近二著

行雲流水

始

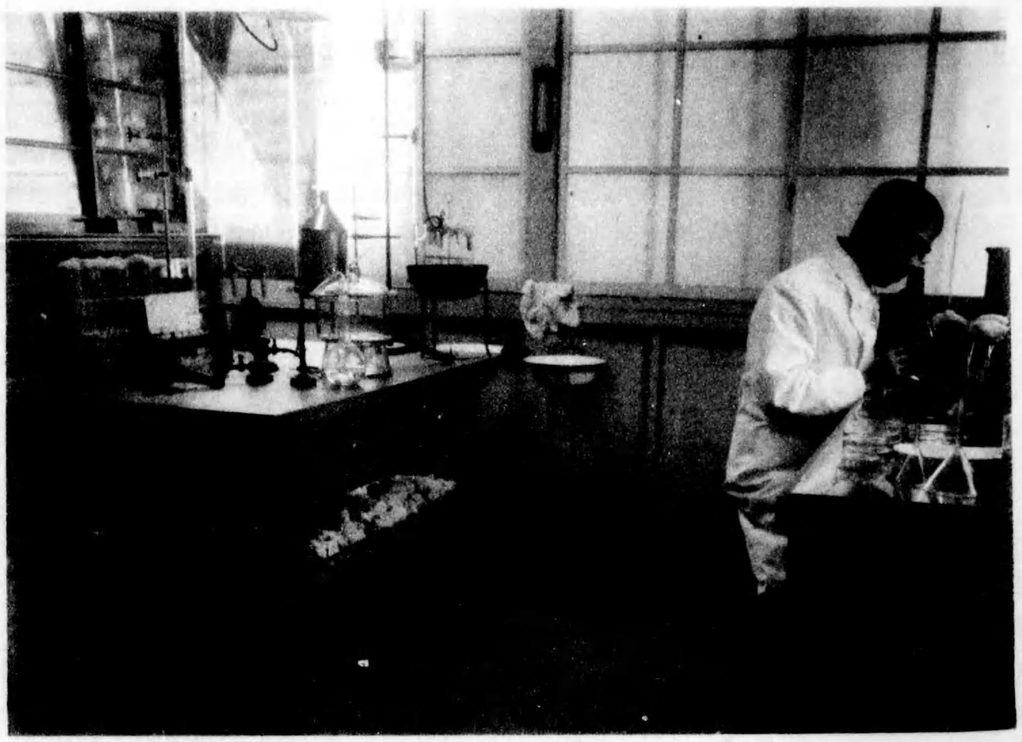


世界一と称される石つり障子あり
元禄年間のごろにつくりしと名称せられば

著者の御諒承を得て市市立傳染病院
大正 7.2.16 内交

ナ100
515

四日市市立細菌撿査所試驗室裡の著者



にしあり泗水のほとり世をわびて
試驗室裡に我れはいそしむ

自序

本書は余が本年四月下旬より極月下旬に亘る半歳餘の折々の山水隨緣記にして嘗て新聞雜誌に掲載せしものを蒐集上梓して一卷となす

余や青春茲に二十餘歳而も兒戯に類する杜撰の文字を小冊子に臚列して敢て江湖に諮ふは自ら顧みて怩忸に堪へざるものありと雖冬日爐邊の伴侶となし給はゞ幸甚なり

大正六年極月下浣

泗水の客舍にて　鮫島近二識

目次

花の吉野より　一
豐川稲荷より　二
濃州千本松より　三
日本ライン河畔より　六
養老の瀧より　九
志摩めぐり第一信　一〇
仝　第二信　一四
仝　第三信　一八
名和昆虫研究所をを觀る　二二
油屋より　二五
鈴鹿峠より　二七
湯の山鼠釜供養より　三〇
橿原神宮より　三一
桃山御陵より　三二
和歌の浦より　三三
芭蕉の故郷塚を訪ねて　三四
世界一の病院より　三六

行雲流水

鮫島近二著

花の吉野山より

（四月二十二日）

拜啓、忙中閑を偷みて孤筇飄然笠置の山巔に攀ぢ後醍醐帝の遺跡を吊ひ、轉じて猿澤池畔に寧樂の春色を賞で本日吉野落と洒落れ花中の人と相成申候、山中の花は上、中、下にて季を異にして開き今は上千本も十二分の盛りにて候、此地は古來文人墨客に依りて人口に膾炙す、更に余が贅筆を弄するの要もなかるべく、本日は御誂向の好天氣の日曜にて懐古探勝の士絡繹たり、吉野は史蹟に富みて花香月

影の裡に點綴し「歌書よりも軍書にかなし吉野山」にて亦「萬人置醉攪芳叢、山寺尋春春寂寥、眉雪老僧時輟帚、落花深處說南朝」と竹外の詩もそゞろ思ひ出され候、後醍醐帝が大業成らず蒙塵し給ひし皇居の遺跡、小楠公が如意輪堂の扉に亡き數に入る名をぞ止めし鏃の跡共に春風秋雨數百年の昔を語り、徃徊去るに忍びざるもの有之候。先は早々不一。

豐川稻荷より

（六月八日）

參州豐橋驛にて豐川鐵道に乘り換へ北に走り、山本勘助を以て聞ゆる牛久保城趾を過ぎ、新綠の間を縫ふて豐川に達す、有名なる豐川稻荷は此地にあり、寺を妙嚴寺と云ひ曹洞宗の巨刹なり、稻荷大明神この境内に鎮座して賽客踵を接す、境内廣く薫風新樹の間に堂塔を認め庭園泉池の賞するに足るものあり、神殿に額きて悠々青草の間に立てば、近來風流を等閑に附する余を嘲けるかに見えければ、余たるもの豈に一句駄句らざるべけんや。

青葉若葉巨刹の庭や春の逝く

濃州千本松より

（七月八日）

寶歷三年極月、將軍德川家重薩藩主島津重年に木曾川修理を命ず、蓋し薩藩は西陲の雄藩にして隱然幕府の一敵國の觀ありて私かに懼

れしところ、その勢力削弱に腐心すと雖太平の御代無名の帥を發するを得ず寧ろ財政上より之れを苦しましむるに若くはなしと、治水工事に藉口して薩摩征伐を企圖せしなり、重年幕府の姦計を知るも微力之れに抗する能はず、恭順幕命に應じ、家老平田靱負を総奉行に大目付伊集院十藏を副役に任じ以下一千餘人、鹿兒島を發して大阪に至り用金三十萬兩を調達せしめ、翌四年二月工を起し五月に至りて一旦中止す、更に九月に入りて再び工を營む、然るに中途にして豫算に不足を生じ成功を期し難し、於茲靱負以下鳩首凝議して更に金二百萬兩を調へ事成るの日豫算超過の責を負ふて屠腹以て主君に陳謝せん斷じて君命を辱むべからずと、櫛風浴雨の辛酸を嘗め十一ケ月を閲し翌五年三月工竣る、而して諸士か君命を全ふして錦衣歸郷の日は笑つて從容死に就くの日なり、夜半影暗ふして夢は故山に飛ぶの時諸士の感懷奈何、電光一閃責任を一死に果たすの相前后して五十人、吁、諸士の死や壯烈なり、悲壯なり、今日の濃美勢八郡の良田黄雲漲り百萬の生靈皷腹して其睹に安んずるを得るは往年諸士の犧牲の賜にあらずや、然るに諸士の偉業も世に著聞せずその芳名も湮滅せんとするを慮り桑名郡多度村有志西田喜兵衛氏之れを慨し大垣町志士金森吉次郎氏と相謀り、明治卅三年四月地を千本松の下にトし建碑式を擧げ芳名を千載に傳ふ、亦麻布學館長岩田德義翁は慨世の志士なり、その憂國の至誠は逆つて筆に舌に諸士の偉業を皷吹

して寧日なし、宜なる哉、天恩優渥昨年十二月靱負に從五位を追贈せらる、死して餘榮ありと謂つべし。

余や諸士と鄕關を仝ふしてその遺業の跡を弔はんの念久し、今宿志漸く酬ゐて千本松紀念碑のあたりを徂徊して往年の遺業を偲びて無量の感慨胸に充ち、轉た、當年薩摩武士の意氣躍如たるを覺ゆ。

殘したる千本松の川堤み薩摩男の氣を吐きしかな

日本ライン河畔より

（八月十一日）

夏山の新綠に聳へ立ちその靑瓦粉壁は脚下を洗ひ去る木曾川の淸流に影を涵す白帝城天主閣に攀ぢて、桐の丸、杉の丸、樅の丸の舊跡に成瀨成時の苦心のさまを偲び、閣を降りて輕舸を木曾川に浮ぶ、蓋しこの地（犬山）より土田に溯る二里の風色ライン河畔に髣髴たるものあるを以て日本ラインの稱あり、近來頓に人口に膾炙し行客相次ぐ、舟は幅三尺餘、長さ數間を超へざる小舟にして舟子二人、一人は舳に、一人は艫に竿を執りて舟を行る、溯江なれば舟の行くこと極めて遲く、湛々たる江水、時に注いで瀨となり、激して湍となり、滙して潭となり、或は盤渦をなして舟凝着し驚玉跳つて舟に入るあり、夏の日に照る兩崖の頹嵐峭綠影を水心に拖き眼鏡岩、駱駝岩、獅子岩のあたりは危巖欹ち江上第一の奇勝なりとぞ、余はこの奇勝に對して恍惚たること暫時、夢は折々ライン河畔に通ふも宿志酬ゆ

るは何れの日ぞ、江上の清風を滿面に受けつゝやがて舟は土田に着す、烟茶少時、舳を回らして舟は搖々として中流に浮ぶ、舟行くこと極めて駛(はや)く山走り石行くが如し、須臾にして舟を不老閣の下に繫ぎ、夕餉を不老閣にてしたゝめ、暮夜遊覽船に掉して鵜飼を見る、屋形船に阿嬌を拉して三味線の音を水に流す粹漢もあり、數隻の鵜飼船には黑裝束の鵜使ひ舳に立ちて鵜に通ずる紐を巧に操(あやつ)り、篝火炎々と水に落ち、潑溂たる銀鱗波に躍るあり。

夢路にも折々通ふ幻(まぼろ)しはライン河畔のいとしの人よ

養老の瀧より

（八月十二日）

養老驛より白雨煙の如きなかを歩みて約十町養老の菊水樓に到る、午(ひる)に數椀を飯して空腹を癒す、階上の一團底抜き騷ぎを演ず、是れ神戸の一成金養老大垣の藝妓を總揚げして大盡遊びをなすなりと、この清境に成金臭紛々たるは嘆ずべし、菊水樓より行こと數丁、淙々たる水聲を聞く、石逕瀑畔に導く、瀑は高さ一百尺、幅二間、削(そ)り立つ絶壁より一直線に落下して瀑壺淺く漸く膝を沒す、瀑畔の更衣所より白衣を借りて浴するに寒冽脾肝に徹するを覺ゆ。

夏の日は巷にも倦(あ)き世にも倦き水あみせばや養老の瀧

志摩めぐり

第一信　（八月廿三日夜鵜方村にて）

余に痼疾あり、煙霞病と云ふ、されど山紫水明の間に放浪して山靈、水神、木魅、石魑に接すれば忽ち癒ゆ。今や天下の青矜、涼を趁ふて山に登り、或は暑を避けて水を渉るの佳快に耽るの士多からんも五斗米に膝を屈するの我が徒、人間萬事塞翁が馬と觀じ漸く數日の賜暇を得て、海の國なる、女護ヶ島なる、志摩へ志し、昨早朝天候を氣遣ひつゝ一傘、一帽、孤影飄然鳥羽行の列車に上る、車中新紙にて友人御園生君（久原鑛業會社囑托醫）が露領ニコライフスク附近にて露助の毒手に斃れし訃報に接し哀悼の涙をそゝぎ、鐵車南進龜山を過ぎ松坂に至れば密雲車窓を壓す、山田に下車すれば細雨糸の如し、兩宮に參拜し坦々たる砥の如き御幸街道をテクる、二見ヶ浦に到りて三重赤十字支部が本年始めて試みし避暑兒童保養所を視察す、事務員の談に依れば入所當時より体重平均二百匁を增加して一般に好成積を收むと、導かれて兒童の室を覗くに午睡時間にて華胥の鄉に遊ふもの大半を占む、長野知事先刻視察來所の由語る、辭して女夫岩より御塩殿神社に賽し停車場前の一旗亭に憩ひ繪ハガキを購ひて京の友へ書き送る、やがて路は海に沿ひ山に入り十餘分にして我が足痕を鳥羽の停車場に印す、直に船に賃して待月樓に投ず。

「鳥羽はよい所朝日を受けて七ッ下れは女郎が出る」と俗謠に唄はれて、東海の良港として古くより繁榮し、青樓軒を並べ歡樂の酒に醉ひし舟人等の潮に錆れし唄聲は艶めかしき絃歌に和して殷賑を極めし當年の俤失せて今や腥き一漁師街の感あり。夜に入りても尙造船所の鐵槌は戛々の音響くは海運界の多忙を意味して賴母し、島廻りも鳥羽に來りしものの必ず試むべき清遊と聞けば、今朝舟を艤して日向島の邊りに至りしに風に妨げられ中止の止むなきに至り引返して樋の山へと志ざす、途中千本格子の娼家あるを過ぎて此の町唯一の古刹常安寺の門に達す、「浦風も荒磯波も今朝凪ぎて かもめ立ち起つ鳥羽の海面」とは先帝陛下が明治十二年二月一夜をこの寺に

過させ給へる翌る朝の御製とぞ承る、寺を過ぎて緩やかに山に沿ふ路を登り六七町、山豁けて平地に二三の茶亭あり、亦奉天の角樓を模して建てし支那風の亭あり、山巔に立ちて俯瞰するに日和山は近くその巔を望みそのかみ九鬼氏が水軍を擁して據りし鳥羽城は海邊近く壘壁尙殘りて當年海城の跡を偲ばしむ、脚下に粉壁瓦屋の鳥羽の街を見る、城に近き蓬萊島は堆翠海に涵しその前に横はるは坂手島その背に管島ありその左に臥するは桃取島にして神島は正に瑠璃盤上の一青螺、右手を望めば安樂島、左方遠く伊良湖崎は蜿蜒として水邊に横はる、紺青の海に一抹を刷く氣船、空外より來る如き眞帆片帆宛として繪の如く、景境の雄大なるこの地第一の稱あり。

午餐後腕車に搖られ〳〵て六里の山道を四時頃鵜方村に着く、途中大廟の別宮なる磯部村の伊雜宮に詣で、今宵は中村屋と云ふに宿を乞ひ、明朝御木本氏の眞珠養殖場なる多德島へ渡らんとす、夜蚊軍の來襲に辟易して蚊帳を吊して筆を執る。

試驗室は九十六度に上りけり海を思ひて志摩へ赴く

大きなる瑠璃盤上の青螺なしふかみどりなる鳥羽の島々

第二信　（八月廿三日濱島町にて）

今朝とく起き出で、鵜方から巡航船で多德島へ渡る、巡航船は僅か四五噸に過ぎない石油發動機船である、多德島は御木本氏の眞珠養殖場で名を轟かしてゐる、余は井島代議士の招介狀を携へて眞珠王に面會を求めたが、王は生憎一兩日前上京不在でその令弟松助氏代つて面談さる、後氏の案内で島を一周し諸所の見物を了へてから瀟洒たる離亭に招せられた、出された芳名錄には蜂須賀侯、清浦子、花房子、加藤子、後藤男、田中男、宮島博士、鳥潟博士、佐々木博士、安達公使等名士の筆の蹟も見得た、而して眞珠養殖所には百餘人の蜑婦が毎日三回宛海中作業をするそうだが彼等は年百年中水底に潛つて貝を漁り日を送つて居る、その漆黑たるべき髮の毛は羊羹色に褪せ苦鬪のさまを語つてゐるが彼等とても人の子、戀もあれば愛もあらう、蜑雲蟹雨幾春秋、この壺中の天地で屑々たるに安んじて居るであらう、多德島から和具村に向ふ、波は靜かで湖上を渡る感が

ある、和具から御座迄二里の險道を獨りトボ〳〵と歩んだ、途中桶を頭に載せた婦人に逢つたが、南國の海道の氣分を漂はせてゐる、此邊は太平洋に面して煙波縹渺、一望際涯なく水天相連り亂礁の邊にも砂白く峭壁の上にも松青い處があつて佳景に富んでゐる、殊に御座の鄕社の附近では右を望めば内海の英虞灣を、左を顧れば外洋の太平洋を眺め得るから左顧右盼して進んだ、御座では和船を傭つて蜑婦の海中作業見物と洒落れた、今日は波が靜かであつたかして蜑婦の小舟も御座岬の沖合遙かに漕ぎ出でて居つた、全体で廿隻も居たらう、私は小舟へ乘り移つて親しく觀るを得た、蜑婦は血氣盛りの女ばかりで其髪は棕梠の皮の樣で皮膚は赤銅色を呈して頑强の

體格は堂々六尺の男子を凌いでゐる、其偉大な體格は如何しても女とは見られない程で私は「蜑婦とは女子生殖器を具へた男性的の人間である」との定義を下し度い。蜑婦の巧拙は嫁入にも影響すると云ふ、水中に潜りて鮑、榮螺を採つて海面で呼吸する時は千鳥の啼く樣なヒュ〳〵と音を出して一種悲哀の感を催させる、夫は小舟で緩く艪を漕いで居る、御座の女は七八人を除く外擧つて蜑婦で男子は概ね遊惰、妻なる蜑婦は纖手よく其夫を養つて眞に女護ヶ島なる名を辱めない、この附近で朝霞暮靄、一種の詩趣を添ゆるものは蜑婦の小舟で、好いた二人は何等束縛ない小舟に棹し沖の鷗に潮時問ふて戀の甘い囁に醉つて居る、彼等にも戀のローマンスは多から

う、私は御座から濱島へ渡つた、濱島は鳥羽に次く町で帆檣林立し出船入船で賑つて居る、而して漁業地である、三重縣水産試驗所もある、古びた女郎屋もある。

あめつちに寶探りし君なれば多德の島も波靜かなり

八月の午後の三時は暑つかりき田舍の道を獨り歩けば

（八月廿五日波切村にて）

第三信

私は岩崎屋と云ふに泊つた、鰹、鰡、鱸の類食膳に上せられ客人をして舌鼓を打たしめる、昨晩隣りに泊り合せた東京のさる會社員で名は逸したが仲々の健脚家と今朝打連れて水産試驗所に縱覽を願つた、所員は快諾して階上の標本陳列所に案内して一々説明の勞を執

られたが私は水産家でも動物學者でもないから餘り興味を惹かなかた、宿に歸つて健脚家先生は直に御座へ渡つた、私は行雲流水の身、別に前程を急ぐでもないから旅館の樓上で悠々半日を消日した、午餉をしたゝめて假睡の夢を貪つたが船頭に喚び起されて船越へ渡るべく巡航船に乘つた、巡航船は火吹竹の樣な煙突からポッポッと煙を吐いて出て行く、舷を叩いて

「船は出て行く煙は殘る殘る○○さんは血の涙」と私が唄つた譯ではないが出船入船の盛なこんな湊の埠頭では哀別離苦の涙を絞つた經緯もあつたであらう、湊を出れば英虞灣に入る、御座は指呼の間にある、私は舳頭に立ちて騁望を擅にした、船は紺碧の海を扳いて峙つ

島を送り山を迎へ長風散髪快心の極みであつた、船越に着いて波切には半里の海岸に沿ふて進んだ、この邊も和具越賀御座の海岸と仝じく眸に入るものは渺々たる紺青の大海原で雲は漠々として遠く水平線を壓して居る、浦曲の眺めも仝工異曲である、波切に着いて不二屋に身を托しそして三四町にして達し得る大王崎へ赴いた。茜さす夕陽を浴びて潮煙の莽々と罩めたる巖頭に立ちて、携へ來つた双眼鏡を手にした、怒濤咽せぶ沖の岩礁には去月擱座した軍艦音羽の艦橋が一部水面に現はれて居る、脚下に韆鞳と寄せる白浪は岩根を嚙んで飛沫面を撲ち萬斛の涼味を感じた、一体に海とか岬とかには戯曲的傳説に富むで居るが、此所の波切五郎の噺も鳥羽で船頭から聞いた、此地は蟹舍蜑莊の一寒村に過ぎないが廿餘年前から不二屋の主人山下氏が奔走して紀州通ひの定期船を寄港せしめて居る、氏が港灣、村治に對する抱負も縷々聞かされた、夜になれば新涼の氣人の懐に入る、燈火の下で、京の友へ旅程を細々と書き送つた。志摩の風物も踏遍數日にして討尋し盡した、明日は濕船で伊勢灣を縱斷して歸泗の豫定である。

「明日はおたちかお名殘り惜しや雨の十日も降ればよい」と綿纏たる情緒を寄せて、遠來の旅情を犒つて私の歸心を阻む志摩の乙女は居ないであらうか、明日は黎明船へ乗らねばならぬ、私の旅行記も之を以て筆を擱く。

さらば志摩の乙女よ——

海に來て物思ふかな若き日の我が半生をかへりみるとき

今日もまた海と島とを眺めけり夏の日に照る光り浴びつゝ

名和昆虫研究所を觀る

（九月廿九日）

九月廿九日朝霏々たる細雨を衝いて鹿兒島へ西下の加納子爵夫妻を名古屋驛に邀へ且岐阜驛に送りて下車し、序でを以て名和昆虫所を觀んと欲し電車に賃し公園内に建てられし研究所を訪ふ、本所は廿餘年前名和靖氏が獨力創設せられし本邦唯一の昆虫研究所にして刺を示して來意を通ずれば標本陳列所に案内せらる、顆〻き農作物山林樹木の害益蟲標本、學術上の分類標本、寫生用の昆虫標本、裝飾用の昆虫等名和氏苦心の跡を語る、後、車中にて托せられし子爵の名刺を通じ且特別陳列所の一覽を乞へば事務員に導かれて平生は固く鎖されし耐火煉瓦造りの西洋館に入る、館は明治四十年阪朝新聞社が江湖に義金を募りて名和氏へ建築寄贈せしものにして　今上陛下未だ東宮に在はせし明治四十二年九月鶴駕を枉げさせ給ひしとぞ承る、館内の標本は本邦産は云ふに及ばず遠く海外に産するものをも蒐集してその數一萬種二十餘萬頭に及び丁寧に箱に納めて保存せらる、蠅蚊等吾人の參考に資するもの少からず、見終りて所長室に通せらる、室内は白蟻蠹蝕の木片及昆虫の標本を以て飾らる、氏は鬚髮

半ば霜を戴き談論風發薩南の老士昔を語るの概あり、氏が昆虫學に志せられしは鹿兒島市春日町の人、田原陶猗氏の感化によるとはその述懷談の一齣なり。

氏は渺たる一農學校出身にし獨學四十年孜々として倦まず撓まずその命名は遠く海外にも喧傳す、氏を有するは獨り岐阜市のみの誇りにあらずして實に我が帝國の誇りなり、德は孤ならず子爵の一葉の名刺は余をして氏の如き眞摯篤學の士と親しく膝を交へてその高說を聽くを得たるは望外の賜なりき、氏は來る十月七日を以て還歴の佳宴を張らるゝと切に自重加養を祈る。

岐阜の市君の名により知られけり長良の川の鵜飼あれども

油屋より

（十月二十日）

大廟參拜の爲め鹿兒島より遙々來泗の母及東上の途次立寄られし萱島のおばさんを伴ひ早朝山田行の列車に上る、途中津に下りて藤堂氏別墅のあとなる津公園に遊び車を走らして阿漕ヶ浦に至り阿漕塚と芭蕉の「月の夜に何を阿古木に啼く千鳥」の古碑とに阿漕平次を偲び、鐵路山田に下車して兩宮に參拜す、余本年に入りて大廟に參拜すること三たび常に神の莊高森嚴の威靈にうたる、薄暮、お杉お玉の間の山を過ぎ古市の油屋に泊す、油屋は古くより遊女屋としてその名籍甚し、かのお紺の油屋騷動の悲劇も演ぜられしが當主に至りて稼業を廢し旅宿を營む、客室七十餘女中三十餘人を算すとぞ、お紺の

間は八十餘年前祝融の見舞を受けしかばそのまゝを模して新たに建て遺品を置きて客の乞ひに任せて見せしむ平常閉ぢて凄愴の氣人を襲ふ、依田學海居士の撰文の額を別室の廣間に掲ぐ、夜杉本屋にて伊勢音頭を觀る、七十餘疊の踊りの間には雪洞の灯火搖らぎ周りの廊架は朱塗の欄干ありて上り舞臺となる、娼婦十數人脂粉を漾はし三絃に和して壁塗りの如き舞をなしつゝ舞臺を一巡し神都趣味の氣分に醉はしむ、疇昔は油屋、杉本屋、備前屋、柏屋にて觀るを得たりしも油屋柏屋は疾くに廢して今は杉本屋備前屋のみ客の需めに應じて催すと、明日二見ヶ浦の勝地を探り鳥羽の日和山に登らんとす。

油屋のお紺と云へる傾城の艶話聞きしも秋なりしかな

鈴鹿峠より

（十一月十一日）

「關の地藏さんに振袖着せて奈良の大佛婿にとる」と古くより東海道筋に謠はれた關の地藏さんに賽した、關は東海道の宿場で昔し榮えた町であつたが今は寂びれて名物の地藏さんで知られて居る位である、私は關で曾遊の三島を連想した、三島は鈴鹿の關で、關は箱根の三島である、この二つの町は似通つて何れも峠の下にあつて昔東海道を往復した旅客に深い印象を與へ宿場女郎屋で賑つて居たが今は衰褪して淋しい町となつて居る。「關の小萬が龜山通ひ月に雪履が二十五足」と云ふ遊女小萬の涙雨も思ひ出された、關から昔の鈴鹿峠の氣分を味ひに行つた、途中狩野探幽がその絶景に筆を投げた

と云ふ筆捨山もあるが赭岩峠つてその上に楓葉が點綴して平凡な山である。「坂は照る〳〵鈴鹿は曇るあひの土山雨が降る」と餘韻嫋々たるこの唄の坂下村には間もなかつた、坂下村から鈴鹿峠には半里、山氣冷かに峠にかゝれば道は開鑿されて崎嶇たる坂路を辿る、峠の中腹に鈴鹿神社と孝子萬吉の碑とがある、峠の頂きに山崎屋と云ふ一軒の掛茶屋がある、私はこゝで午餉をしたゝめて色々舊藩時代の話を聞いた、この家は二百餘年前當主の何代かの先祖が建てた家で大黒柱は漆を塗つた樣に黑光りして居る　先帝陛下もこの道を二度ばかり御通過になつたそうで茶屋の婆さんが當時の光景を手に取る樣に話して聞かせた、こゝから江州境には僅か一町位で達し得

られて草津を經て京都に達する路である、私は江州の山中と云ふ村へ足を踏み入れたが僅か數軒の百姓家のみで鷄が寂しげにあたりをクツクと餌を漁つて居た、そして土山の田村神社（坂ノ上田村將軍を祀る）に詣で水口へ出る筈であつたが日脚短い秋の日は里人の注意で止めた、踵を回らして坂下村に出で諸岡彌惣七と云へる今年八十歳の攫鑠として壯者を凌ぐ概ある爺さんから昔の話を聞いた、仲々話せる爺さんで一言一句皆活きた歴史である、頃日大阪朝日新聞にこの爺の話したことを十日位も掲載たと云ふ、舊幕時代有名であつた大竹屋小竹屋の跡は水田桑園に變じて荒涼たる光景を呈して滄桑の感を深ふせざるを得ない、當年西國の諸大名が金紋先箱勇しく威

風堂々あたりを拂つた行列をも想像せずには居れなかつた、徂徊顧望私は秋の落日を踏んで龜山へ歩んだ。

さてみばれ古き鈴鹿は秋の夢

湯の山鼠蚤供養より　（十一月十八日）

十一月十八日、秋晴れの紺碧の空に雲縹し、この日湯の山三嶽寺にて鼠蚤の大施餓鬼供養あり、參列するもの百十餘名、湯の山驛にて輕鐵を乘りすて、徒歩三嶽寺に嚮ふ、沿道の紅葉秋蘭にして潺々たる三瀧の清流は水瘦せて岩秀づ、午前十一時施餓鬼供養は開始され寺内の祭檀前には藤村師外十數名の僧侶整列して讀經し下里藥劑師

賽詞を朗讀し有志の燒香の煙縷々として低迷す。

秋晴れの寺や供養の煙縷々

橿原神宮より　（十一月廿三日）

我等母子兩人は法隆寺、龍田の紅葉、奈良、丹波市の天理教本部、初瀬の長谷寺等の名所舊跡を探り、今朝畝傍に下りて飛鳥川を渡り天香久山を左に望み、神武の御陵に詣で久米寺に寳し、更に畝傍山麓の橿原神宮に參拜す、砂子淨らに嚴として襟を正ふせしむ、神殿に額さて神武の帝が建國の覇業を定め給ひし二千五百餘年の昔に溯りてそのかみの事など我が腦裡を徂徠す。

小春日や建國の史書ひもとかむ

桃山御陵より

（十一月二十五日）

洛内、外を探勝し歸途、伏見の稻荷に賽し桃山に嚮ふ、御陵は驛を距る數町の丘陵にあり、坦々たる賽路を御陵前に達し、掬び漱いで、鞠躬如として瑞籬近く進み額き、白砂の御塚は仰くも崇高森嚴、坐ろ御在世の御事とも偲びて眼前に髣髴たり。

就中明治の春は隆々と

和歌の浦より

（十二月二十日）

出で行く船の殘す煙に心に殘る人もなく、孤影悄然中津丸船上の客となり、麗港解纜神戸に航す、風穏かに波靜かなり、下級船客に出て稼の紡績工女多し、船員呼んで「絲姫」と云ふ、船中未婚の一佳人あり、北陸の產艶、容花の如く頗る衆目を惹く、船は果敢なき戀を載せて瀨戸内海に入る、海に棊布する大小三百の青螺送り迎へ繪の如き帆光島影の飽かぬ景趣に聊か旅情を慰め、神戸に上陸して腕車、滊車、電車と車を換ふる五たび、和歌山を經て深更和歌の浦に入り「わしべや旅館」に投ず、當館は古へより紀州侯の屢々駕を枉げられし所なりとぞ、夢圓かにして曉縹さ紀三井寺の六時の鐘には眼も覺めず、數竿

の朝暾に漸く醒め、朝飯后、片男波、塩竈社、妹脊山、觀海閣、多寶塔を逍遙す、海光山色描くが如し、更に電車に賃して紀三井寺に詣づ、寺は古雅優美、西國巡禮二番の札所にして、遠汀近浦、和歌の浦の大觀を一眸　收む。

和歌の浦汝れの噂に聞き惚れてこのわかうぐはは遠〳〵と來し

芭蕉の故郷塚を訪ねて

（七年一月一日）

荒木又右衛門の伊賀越仇討を以て聞ゆる伊賀上野にて越年し、元旦早々芭蕉の故郷塚を訪ふ、塚は愛染院の塋域内に在りて、芭蕉の遺髪を埋めさゝやかの一草堂を建て中に古碑一基を置く、門人嵐雪の筆になると云ふ墓銘「芭蕉桃青法師墓」の七字も堙滅して墓木拱せり、俳壇の一大明星たる翁にふさわしく、草堂も古碑も古色蒼然、頗る俳味に富む。

風流漢は君のおくつきおとなひぬ知己を得たりとはゝ笑み

給へ

世界一の病院より

（短歌二十二首）

世界一と汝れに名づけし博士ありたまむれのごとつけし名なれば

伊勢に來て一年過ぎぬこぞの秋ペスト騒ぎのもなかなりしが

縁あり泗水のほとり世をわびて試驗室裡に我れはいそしむ

秋の夜を伊勢音頭のうつくしき舞姫を見る杉本屋かな
さらぬだに秋の長夜は淋しきを閨に添寝の人もなき身は
ふるさとの甲突川の水痩せて利通を生み隆盛を生む
新平に手をとられ衛生局の長となりける夢を見しかな
ルーマニアよりのそらごと喞つかな有象無象は秋の長夜に
大ゐなる希望(のぞみ)を抱きてあめりかへ旅に赴く君をうらやむ(Kさんへ)
ふみ來る東京よりとなつかしき秋のたよりを君に見るかな
あな可笑(おか)し戀は曲物青春の血に燃ゆるなと君の口より
戀の歌作りてみばや初戀の遠きむかしのろの思ひ出に
郵便と聲聞くさへも胸騒ぐ日々(にちにち)夜々(よよ)にたより待つ身は

からみたる義理人情のなかにして相見て語り得ざる悲しさ
西の空筑紫のはてに君ありとこのわかうどはふみに慰む
娶れよと切なき母の親心いなむすべなし年暮れんとす
かにかくに三十(みそぢ)路とならば娶るべし案じ給ふな秘め事もなし
君が名と我が名をならべふるさとの母に送るはいついつの日ぞ
なつかしきこの鹿兒島に君なくはなつかし事も仇となりけり
歸りしに何とせうぞやたまぎれぬ一昨日の午后君逝かんとは
病みませぞまゐるに遠き數百里さすらひの子は今歸りゆく
たろがれの瀬戸内海の夕凪に果敢なき戀を船は載せゆく

行く雲に流るゝ水のさだめなき
我が旅草を摘み入れるかな

著者

大正七年二月九日印刷
仝　年仝月十二日發行

非賣品

發行兼著作者　三重縣四日市市役所内　鮫島近二

印刷者　仝縣仝市濱田一九〇二ノ一　中川政吉

印刷所　仝縣仝市仝町　中川印刷所

不許複製

終